A・エヴァンズにおけるクレタの土器の研究

——装飾様式と文様を中心として——

勝又俊雄

序言

クレタ考古学の基礎的研究は、アーサー・エヴァンズ卿（Sir Arthur Evans）の「クノッソスのミノスの宮殿」'The Palace of Minos At Knossos' vols. 4. 1921—1936. rep. 1964. である。エヴァンズは、クノッソス宮の一九〇〇年の発掘以来、雑誌 B. S. A. にその年々の成果を発表してきた。その報告を整理し、考察を加えたこの研究書は、クノッソス宮の各所の精緻な調査、出土遺物の多方面からの比較を豊富な図版・プランを用いて論ずる。それのみならず、クレタの東部・南部の諸遺蹟の発掘の成果を取り入れて、クレタ文明全般にわたる研究書となっている。

私は、本稿において、エヴァンズの研究書に基づいて新石器時代から青銅器時代後期に至る土器の装飾様式と文様を自然主義の興隆という観点からとらえ、整理してみようと思う。

一、クレタ考古学の編年

クレタ考古学の編年は、クノッソス宮から検出された土器の分析によって構築される。その編年は、主要な三つの時代に分割される。つまり、「初期」ミノアン 'Early' Minoan、「中期」ミノアン 'Middle' Minoan、「後期」ミノアン 'Late' Minoan である。これらは、それぞれ EM, MM, LM と略記される。これらの三時代は、それぞれ I, II, III の三期に下位区分され、さらに MM I—III と LM I—II は、a, b に、LM III は、a, b, c に再下位区分される。

クレタ考古学に時間の枠組を与え、編年体系を確立させたのは、古代エジプトの編年である。エヴァンズは、様々な古代エジプトの編年体系の中で、エドアルト・マイヤー (Eduard Meyer) の編年を採用した。[1] その結果、クレタ考古学の編年体系の EM, MM, LM という主要三時代は、古王国、中王国、新王国初期に相当する。[2]

なお、エヴァンズの編年は次の通りである。

EM I 前 3400年—前 2800年
　 II 前 2800年—前 2400年
　 III 前 2400年—前 2100年
MM I 前 2100年—前 1900年
　 a 前 2100年—前 2000年
　 b 前 2000年—前 1900年
MM II 前 1900年—前 1700年
　 a 前 1900年—前 1800年
　 b 前 1800年—前 1700年
MM III 前 1700年—前 1580年
　 a 前 1700年—前 1600年
　 b 前 1600年—前 1580年
LM I 前 1580年—前 1450年
　 a 前 1580年—前 1500年
　 b 前 1500年—前 1450年
LM II 前 1450年—前 1400年
LM III 前 1400—
　 a 前 1400年—前 1300年
　 b 前 1300年—前 1200年
　 c 前 1200年—

本稿では、LM II までの土器を対象とした。クノッソス宮殿は、前一四〇〇年に地震で破壊され、続く LM III 以降、宮殿の建築はみられない。しかし、現代の研究の進歩は、一九五二年の線文字Bの解読によって前一四五〇年頃つまり LM II のミュケーナイ人のクノッソスの支配を証明した。だが、エヴァンズは、LM II のクノッソスをクレタ人の文明の最後の繁栄と考えている。それ故に本稿においてもエヴァンズに従い LM II の土器を考察の対象とする。

二、自然主義と形式主義

クレタのあらゆる美術の領域において最も重要な働きを為した因子は、自然主義である。クレタ美術の領域は、それぞれの時代における自然主義の盛衰によって大きくその様相を変える。自然主義は、美術史上では一般に自然のままの相を直写することを指す。クレタにおける自然主義は、確かに、その根底において自然の忠実な模倣を志向している点で一般的自然主義と一致する。しかし、クレタの自然主義は、自然の「外面的に変化する現象面」[3] をその本質とする素朴な自然主義を指す。

形式主義は、クレタにおいて自然主義の派生概念に過ぎない。ここでは、各時代の美術領域の自然主義の強弱との関係において把握されるべきである。敢えて言うならば、形式主義は、対象が個としての生命を失い、その本質を抽象され、無機的装飾の単位へと志向することを指す。この意味では、クレタの美術領域においてその歴史は、新石器時代から LM II に到るまでの自然主義の盛衰の歴史であると言うことができる。

土器は、考察の対象となりうるだけの各時代の出土量を有する領域のひとつである。ここで、土器美術の領域における自然主義の時代的変遷を概観しよう。

自然主義の発露の最も初期は、新石器時代中期である。しかし、EM を通じて自然主義は、みることができない。MM I に至って、自然主義が興隆する。まだ新石器以来の幾何学的傾向が強いけれども、多彩によってその単調さが救われている。MM II には、自然主義は、上質の多彩と結合し、MM I より強まる。MM III には、自然主義は、多彩を失うにもかかわらず、最も徹底し、多彩の喪失を補って余りある。LM I は、自然主義の顕著な時代である。しかし、LM Ib 頃には、形式主義が台頭し始める。そして、LM II には、自然主義よりも形式主義が支配的となる。さらに、宮殿崩壊後の LM III には、自然主義は、消滅する。

三、土器装飾様式

クレタの土器を装飾する様式には、二通りある。一つは、明色地暗色文 (dark on light) であり、一つは、暗色地明色文 (light on dark) である。この二つの装飾様式は、各時代につれて交代する。その交代を、ここで時代別に概観する。

新石器時代後期には、暗色地明色文が最初にみられる。これは、光沢のない黒色グレイズ・スリップ (glaze slip)[4] の土器面に白色充塡幾何学刻点刻線文を白色石灰顔料で模倣した彩文土器である。

EM I には、暗色地明色文に加えて明色地暗色文がみられる。EM I の暗色地明色文技法は、新石器時代後期と変化ない。一方、明色地暗色文は、粘土の淡黄地に暗色かあるいは、赤っぽい褐色の釉薬 (glaze)[5] を用いて幾何学文を施す装飾法である。これに用いられた釉薬は、ダンカン・マッケンジー (Duncan Mackenzie) の指摘にもみられるように、エーゲ海域における真の釉薬技術の最初の使用例である。[6]

EM II の前半には、EM I と同様の明色地暗色文がみられる。しかし、EM II の後半には、土器装飾法は、暗色地明色文に代わる。これは、「斑文土器」'mottled ware' あるいは、出土地に因んで「ヴァシリキ」'Vasiliki' 式土器と呼ばれる。これは、焼成の過程で煙の配置によって造り出される斑文——黒いくまどりを持つ赤、黄色——をその特徴とする。

EM III の暗色地明色文の技法は、やや砂を含む土器面に塗られた黒褐色釉薬の上に鈍白色の顔料で幾何学文を描く装飾法である。しかし、明色地暗色文は、みられない。

MM Ia には、EM II と同様の明色地暗色文の技法がクノッソスを中心にみられる。しかし、MM Ia における主要な土器装飾様式は、暗色地明色文である。これは光沢ある暗色または黒色の釉薬地にさまざまな色彩を盛る技法である。つまり、これは、暗色地明色文様式による多彩装飾である。色彩は、EM III の鈍白色が新しい

くっきりとした白色へ、EM III を特徴付けるインド赤（代赭色）が明るい朱色へと変化する。この他に、濃い赤、オレンジ、淡黄がみられる。

MM Ib においても主要な装飾様式は、暗色地明色文である。しかし、その技法は、改良される。暗色釉薬は、より黒色化し、一層多彩な色彩効果を生み出しうる結果となる。これにつれて色彩も改良される。MM Ia の明るい朱が中心となり、オレンジ・イエローが徐々に純粋な黄色に近づく。

MM IIa においても暗色地明色文の時代である。そして、その技法においても MM Ib と変化はみられない。しかし、多彩の色調が、原色のけばけばしさから繊細な色調のニュアンスを表現するようになる。マッケンジーによると、白色は美しい乳白色へ、赤色はオレンジあるいは赤褐色を帯びるようになり、深紅色は桜桃色を帯びる。さらに黒色は、時々紫に代わって金属の輝きを示すのに用いられる。[7]

MM IIb においても、暗色地明色文が顕著である。そして、その技法も MM IIa と変化ない。

MM IIIa において暗色地明色文は、支配的である。しかし、暗色地明色文による多彩装飾は、ほとんどみられなくなる。[8] その結果、MM IIIa の暗色地明色文の技法は、粗い土器面に粗悪な暗色釉薬を用い、その上に白色顔料で文を描く。しかし、釉薬をもつ土器は少数で、ほとんどは地の粘土面を呈する土器である。この土器製作技術の断絶は、MM IIb 末の地震による宮殿の破壊に求めることができる。

MM IIIb には、暗色地明色文は、MM IIIa の低迷から脱して、新たな芸術表現の意味をもつようになる。しかし、多彩は、一部に残存するだけで、[9] 暗色地明色文による単彩装飾が支配的となる。その技法は、紫がかった褐色地に粉末状白色顔料を用いる。

LM I と LM II には、明色地暗色文が暗色地明色文に代わって、主導的装飾様式となる。その技法は、光沢ある淡黄釉薬地に褐色顔料で装飾文を描いてゆく明色地暗色文による単彩装飾である。しかし、多彩は、極く一部に残存する。[10]

明色地暗色文と暗色地明色文とが一つの土器の上で混用される作例がいくつかみられる。これは、両様式が一つの土器上に交互にパネル状に表現されることである。[11] その代表的作例を三つ挙げる。

MM Ia のパライカストロ (Palaikastro) 出土の「フルーツ・スタンド」'Fruit-stand' には、四つ葉の花の花弁を中心に土器の内外にわたって両様式が施される。

MM IIb のファイストス (Phaistos) 出土のジャア (jar) には、両様式の装飾パネルが白色の縦線で区別されて描かれる。

MM IIIb—LM Ia のザクロ (Zakro) 出土の濾過器（図

図版1　スター・アネモネ

版1）には、肩部の淡黄地に褐色の螺旋渦巻帯が、胴部の褐色地に白色の自然主義的スター・アネモネ（Star Anemone）が、それぞれ描かれる。

四、土器装飾文様

1、幾何学文様

幾何学文様は、新石器時代中期において初めてみることができる。これは、研磨された黒色土器面上に市松・山形等の簡単な直線の混合文である。

新石器時代後期の幾何学文は、技法が刻文から彩文へと変化するだけで幾何学文自体に変化はない。

EM I の幾何学文は、ハギオス・オヌフリオス（Hagios Onuphrios）出土の水さしにみられるような直線群であり、グルニア（Gournia）出土の水さしにみられるような線影文である。

EM II の前半の幾何学文様は、EM I と比較すると、格段の進歩を示す。つまり、単一の文様を中心に装飾することから、複数の文様との関係において装飾することへと発展する。その作例は、モクロス（Mochlos）出土のボウル（bowl）である。これには、線影のある三角形がその先端で結合した蝶々文が、さらに同心円、垂線の束が随所に描かれる。

EM II の後半においては、斑文土器が中心的装飾法となるので、彩文土器はみられない。

EM III の幾何学文は、従来の直線文に加えて、曲線文を多く取り入れる。その中でも螺旋文が土器装飾に適用される。螺旋文のクレタへの導入は、キクラデス（Cyclades）諸島の影響に大きく負うている。[12] 螺旋文は、グルニアの北のトレンチ一〇出土の土器片群にみられるように、単一の螺旋と連結した螺旋を持つ。円花文（rosette）、∫∫花綱も同じくグルニアの土器片群にみられる。直線文は、器面全体を被わず、二本の平行線間に展開するようになる。

MM I における幾何学文は、EM III と変化ない。しかし、MM Ia には、新石器時代中期の山形・市松等の幾

何学文が多彩によって描かれる。[15]

MM II 以降、自然主義の興隆とともに土器装飾文から幾何学文は消える。

2、自然物文様

自然物文様は、多くの場合、宮殿壁面のフレスコ画の題材を模倣することによって得られる。多くの動植物は、同種をフレスコ画に求めることができる。

(A) 植物文様

①植物　自然主義の未発展の段階においては、土器面上に描かれた植物は、極めて幾何学的な傾向を備えているので、それが果して何の種に属するのか見分けることは難しい。ここでは、これらを単に「植物」として整理する。

植物を描く土器は、クノッソス西庭試掘坑出土の新石器時代中期の土器片である。これは、白色充塡刻線で表現された大枝らしきものを示す。しかし、新石器時代後期、EM を通じて植物文は、みられない。

MM Ia の自然主義の興隆とともに植物は、主要装飾文となる。しかし、依然として植物が何の種に属するか見分けることができない。その作例は、クノッソスの西庭下の家出土のカップである。これは、白の葉脈をもつ三枚の赤の葉を示す。

MM Ib の植物文も依然幾何学的である。それ故に、植物文の多くは、織物文を想起させる。その作例は、先のパライカストロ出土の「フルーツ・スタンド」の台脚部の装飾帯である。

②クロッカス　クロッカス (crocus) の代表的作例は、MM IIb のカマレス (Kamares) 洞窟出土のブリッジ・スパウテッド・ポット (bridge spouted pot) である(図版2)。これは、赤い円盤装飾帯に支えられた白色のうねる地面に、葉状茎を持つ赤のクロッカスの花を描く。クロッカスは MM II 末までに属する現存唯一のフレスコ画「サフラン摘みの少年」'Saffron gatherer' にみられる。[16]

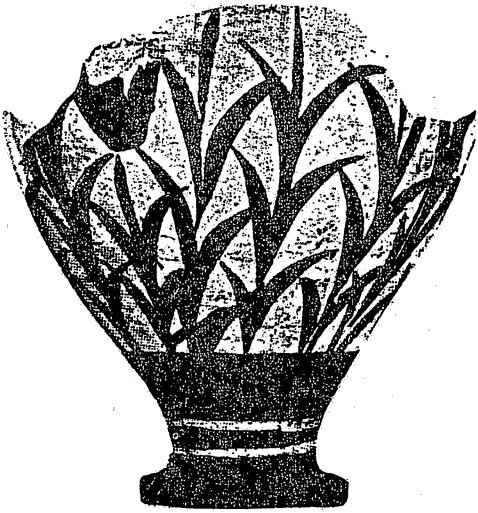
図版2　クロッカス

③聖母ユリ　聖母ユリ (Madonna lily) は、MM IIb のクノッソス出土の水さしにみられる。白いユリ花と赤い

図版3　聖母ユリ

アシあるいは草類は、LM Ia に最も顕著に描かれた植物文である。これは、クノッソスの南に広がるジップセイズ（Gypsades）の丘の井戸出土の多量の土器群がよく示す。また、クノッソス宮「東の階段」East Staircase）下の堆積出土の植木鉢（flowerpot）もアシあるいは草類を示す（図版4）。

⑤パピルス　パピルス（papyrus）は、クレタの美術領域においては、



図版4　アシあるいは草類

葯が描かれる。

聖母ユリが好んで描かれたのは、MM IIIb である。その代表的作例は、クノッソス宮南東区画の「ユリの壺の倉」'Magazien of Lily Vases' 出土のジャアである（図版3）。これは、紫がかった褐色地に白色で描かれたユリの茂みを示す。ユリのフレスコ画は、MM IIIa の「南東の家」'South-East House'（クノッソス宮）、MM IIIb のハギア・トリアダ（Hagia Triada）からそれぞれ出土している。

④アシあるいは草類　アシ（reed）あるいは草類は、MM IIIb のクノッソスの南東区画出土の浴槽の内側にみられる。アシあるいは草類のフレスコ画は、MM IIIa の「南東の家」出土のフレスコ画断片である。

MM IIIb の「フレスコの家」'House of the Frescoes' 出土のフレスコ画に最初に描かれる。しかし、土器上に描かれるのは、LM Ia が最初である。その作例は、クノッソスの北ニル・カニ (Niru Khani) 出土の土器片である。このパピルスは、極めて形式主義的な傾向を帯びる。それ故に、ワズリリィ (Waz lily) と非常に類似し、下の弧状葉は、イチハツを想起させる。

LM II のクノッソスのロイヤル・ヴィラ (Royal Villa) 出土のアンフォラ (amphora) 上のパピルスは、尖った葉梢に囲まれた三本のパピルスである。その背景には、水の描写と考えられる波状線が描かれる。これは、パピルスの繁茂地エジプトのナイル河畔の LM II のフレスコ画の模写と考えられる[15]。

⑥しゅろ　しゅろ (palm) は、MM IIb の「ルウム・ウェイトの地下室」'Loom-Weight Basement' 出土のジャアにみられる (図版5)。わずかに起伏する地面に立つ三本構成のしゅろは、中央にバラ色の開花を示す。全体の効果、特に地面の起伏は、フレスコ画の影響を思わせる。

LM IIb には、しゅろは、顕著に描かれる。MM IIb にみられた下枝の誇張された弧は、引き継がれる。その作例は、プセイラ (Pseira) 出土のリュトン (rhyton) である。このしゅろは、形式主義が著しいので、しゅろの特徴である開花が草状の突起と化す。

図版5　し　ゅ　ろ

⑦交配種　植物の中には、他の種と交配して新たな種を形成する植物がある。この異種間の交配は、MM II の貝殻にもみられるように、クレタの美的表現手段のひとつである。

二種の植物の簡単な交配の代表は、ワズリリィである。これは、エジプトのナイル・デルタの女神ワゼット (Wazet) を象徴するパピルスの茎を表現したワズ (Waz) と聖母ユリとの交配である。ユリの神聖は、イソパタ (Isopata) 出土の印璽が示すように、女神とともにあることから明らかである。その代表的作例は、LM Ia のクノッソス出土のカップである。(図版6)

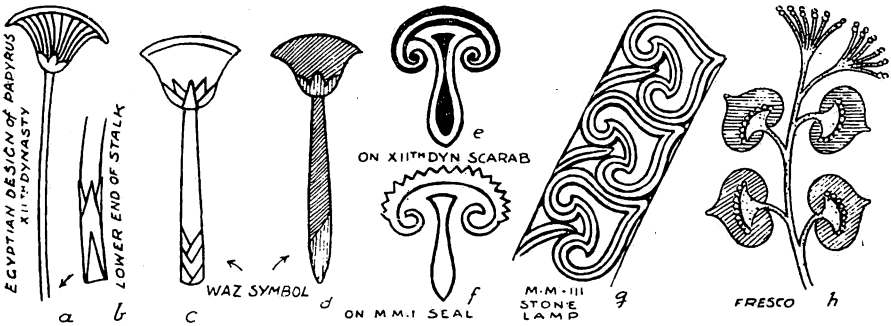
図版6　ワズリリイ

交配植物の中で最も顕著な植物は、「聖なるツタ」'Sacral Ivy' である。これは、エジプト第一二王朝の天蓋付ワズ (canopied Waz) にツタの葉が被せられた交配種である。その結果として全体の形がツタ状であり、ワズが神聖であるので、「聖なるツタ」の名がある（図版7）。その代表的作例は、プセイラ出土のジャアである。脚部の「聖なるツタ」は、パピルスの房の開花した上端を描写する。

（B）海生物文様

海から取材したモチーフを用いた海生物文様は、「海の様式」'Marine Style' と呼ばれる。「海の様式」は、MM Ia のクノッソス出土のボウル上の魚に最初に認められる。しかし、LM Ib に「海の様式」は、土器装飾文の中心となる。

二次元的表現



図版7　聖なるツタ，その由来を示す比較

①イルカ　イルカ (dolphin) は、MM IIIa のパッキアモス (Pachyammos) 出土の二個のジャアの上に描かれる。これらは、土器装飾文様にイルカが描かれる最初の作例である。一つのジャアは、波しぶきを被った岩を上に、小石の浜を表現する白点帯を下に描き、その間の波状空間にイルカを描く。他のジャアは、波間から飛び上ったイルカを描く。パッキアモスのイルカもフレスコ画からの影響を示す。

LM Ib のプセイ

図版8　タ　コ

図版9　形式化したタコ

ラ出土の「なし型」'pearshaped' リュトン[16]、LM II のクノッソス宮の西出土の土器片は、形式主義化した大きな目のイルカを示す。

②タ　コ　「海の様式」のなかで最も顕著な装飾文は、タコ (octopus) である。その代表的作例は、LM Ib のプセイラ出土の「鐙壺」'stirrup vase' である（図版8）。これは、海藻、ほら貝 (triton) の間で、一匹のタコが両眼をあけ、八本の長い吸盤付の足をからませながら動く様子を描く。

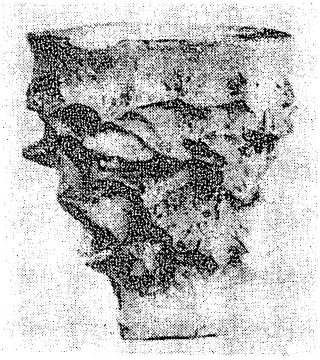
LM II のクノッソス宮の北西境界出土のアンフォラのタコ（図版9）は、プセイラのタコと比較して形式化が著しい。このタコは、七本の足を持つが、それらは、全体にからまなくなり、しかも吸盤を持たず、螺旋形の末端で終る。これらのタコの表現方法は、LM II のタコの表現の特徴である。

③アルゴナウト　アルゴナウト (argonaut)[17] は、元来八本足であるが、MM III 末以降三本に減じられて表現される。その代表的作例は、LM Ib のエジプト出土の「マルセイユ」'Marseilles' 水さしである（図版10）。これには、小さなアルゴナウトが器面全体に散りばめられ、その中には、天蓋を足の上に頂くアルゴナウトもみられる。その間には、三つ葉型[18]あるいは四つ葉型の岩と、それに付着した海藻、海中に漂う海藻が描かれる。これには、プセイラのタコの壺にみられる多様な装飾文間の有

かある。その代表的技法は、MM Ia に最初に現われる「バーボタイン」'barbotine' 式土器装飾法である。「バーボタイン」とは、器面の任意の所に盛り上げたスリップを指す。それ故に、それは、一種の浮彫と同様の効果を生む。「バーボタイン」技法の起源は、海の甲殻類なかでもカキ、ウニ、貝殻等の突起の多い海生物にあると考えられる。そして、MM Ib から MM IIa の間に多彩と結合し、MM Ib のクノッソス宮南西出土の水さしにみられるような最良の作例を造り出す。しかし、MM IIb には、みられなくなる。

図版10　アルゴナウト（タコブネ）

①**フジツボ**　フジツボ (barnacle) の代表的作例は、MM Ia のクルウラ (Kouloura) 3下の家B出土のカップである（図版11）。この器面には、フジツボを模倣する「フジツボ細工」'barnacle work' が高く盛り上げられ、浮彫的効果を出す。



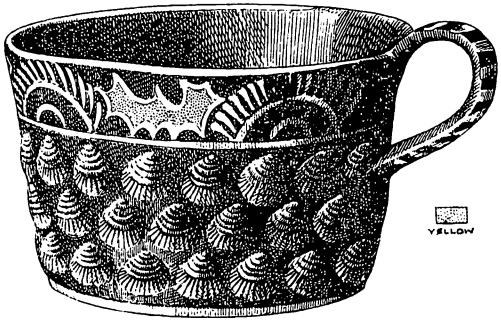
図版11　フジツボ

②**交配種**　ファイストス出土の MM IIa の大きなカップには交配された二枚貝らしきものが、その器周を機的調和が崩れ、主要装飾文のアルゴナウトの無機的な反復が顕著にみられる。

④**交配種**　巻き貝と二枚貝との交配種は、MM Ib のカマレス出土の注口付壺にみられる。四個の巻き貝らしきものが描かれる。これは、巻き貝としてのムレックス (murex) の突起と、ドリウム・ガレア (Dolium galea) としてのフンを頂点に持つ。しかし、二枚貝のように閉じたままで穴はない。

三次元的表現

「海の様式」は、三次元的に表現される場合がいくつ



図版12　交配二枚貝

回る（図版12）。これは、ウェヌス・ウェルカタ（Venus verrucata）とペックテン（pecten）のそれぞれの特徴より構成される。頂点を中心とする同心円状の輪はウェヌス・ウェルカタ、先端のアーチはペックテンの特徴である。この浮彫は、凍石製の型を器面に当て、その裏側に指を当て、両側からの指圧によって成就される一種の打出しである。[19]

3、非自然物文様

（A）建築装飾文様

①眼状円盤装飾帯　眼状円盤装飾帯は、MM IIb を特徴付ける建築装飾文のひとつである。その作例は、「ルウム・ウェイトの地下室」出土の注口付ジャアである。これには、赤褐色の核に、オレンジ色の周囲を持つ円盤がその器周を走るのが描かれる。円盤の起源は、MM IIb の「町のモザイク」'Town mosaics' にみられるように、宮殿ファサード（façade）の彩色された丸い梁の頭に求めることができる。

②腰羽目　彩色しっくい腰羽目（dado）は、MM IIb の「ルウム・ウェイトの地下室」出土の注口付ジャアにみられる。三日月形の帯が口縁部と胴部に乳白色と明るい赤色を用いて交互に描かれる。また、実際の彩色しっくい腰羽目が同所から二枚出土する。

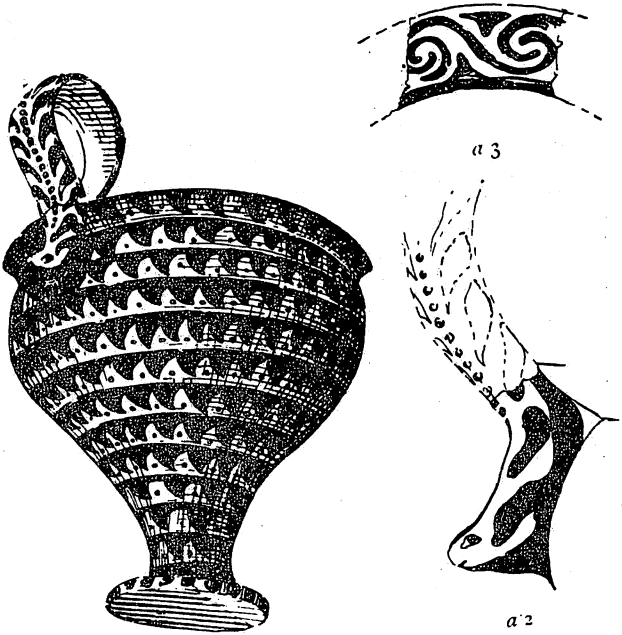
ファイストス宮第五区出土の壺の天井文、LM II の「宮殿式」'Palace Style' アンフォラのフリーズ（frieze）文は、彩色しっくい腰羽目同様、建築装飾文に含まれる。しかし、建築の空間を彩色するという意味では、フレスコ画が当然含まれるべきであるが、本稿では土器を対象とするので含めない。

（B）神　聖　文

聖なる意味を持つと考えられる装飾文は、LM Ib 以降顕著になる。その代表例を四つ扱う。

①アダー・マーク　アダー・マーク 'adder mark' は、LM Ib のクノッソス出土のゴブレット（goblet）に描かれる（図版13）。三角形の波形の中に一つの点をもつ型は、クサリヘビの皮膚の模倣である。[20] そして、ヘビは、MM III の「神庫」のファイアンス製の女性像にみられるように、女神と緊密な関係にある。

②双　斧　双斧（double axes）は、LM II には最も顕著になる。その作例は、クノッソス宮の北西の聖所ホー



図版13　アダー・マーク

スコ画における円柱に指し込まれた双斧の描写と考えられる。[29]

③アンク　アンク(ankh)は、エジプトにおける生命の象徴である。LM IIb のファイストスのゴブレットには、二本足のアンクと双斧との混合型がみられる。

④8の字型盾　8の字型盾は、LM Ia のイソパタの第五石室墓出土の埋葬用ゴブレットにみられる。このゴブレットの側面には、猪の牙製のヘルメットが描かれる。8の字型盾は、LM Ia のクノッソス宮の「ロッジア」'Loggia' の「盾のフレスコ」'Shield Fresco' の影響を受けたと考えられる。8の字型盾の神聖は、ミュケーナイの黄金印璽にみられるように、好戦的女神の象徴に求められる。

(C) 貴金属細工文

葉状帯は、貴金属箔製の花鎖に起源があると考えられる。その作例は、MM Ia のクノッソス出土の土器片である。しかし、葉状帯は、MM IIb 末には、「ルウム・ウェイトの地下室」出土のジャアにみられるように、細くなり葉状を呈する。

(D) 金属器装飾文

銀器の繊細な打出し縦溝彫りの微妙な明暗は、クノッソスのクルウラ出土の MM IIa の「乳白色縁取り」型 'creamy-borderd' class のフルーツ・スタンドの受け台のル出土のジャアである。長短八本の双斧がアシあるいは草類とともに描かれる。[30]

双斧の表現は、単なる聖なる武器の表現にとどまらず、双斧を含む場景の表現としてもあらわれる。その作例は、LM II のイソパタの「王墓」'Royal Tomb' 出土のアンフォラである。これには、双斧の刃を持つ角柱状の棒が描かれる。これは、クノッソス宮礼拝所を描くフレ

断片に表現される。銀器の輝きを模倣した乳白色の縁取りを持つ円盤の内側には、やや褐色の濃淡二本一組の支脈が機械的に反復される。この支脈による装飾文は、「べつ甲波状」'tortoiseshell ripple' 文と呼ばれる。

（E）石　理　文

石製容器の石理、特に角礫岩・礫岩・ライパライト岩のまだらは、多彩装飾の端緒となったと考えられる。その代表的作例は、MM Ib のクノッソス出土の土器片である。ここにみられる白色縁取りをもつ赤いまだらの石理は、同所出土の角礫岩の蓋の自然な色合のコンビネーションの正確な模倣である。

多彩による石製容器の模倣は、多彩が一般的に消滅する MM IIIa の土器片上に、白色縁取りとともにみられる。これは、多彩の発展が角礫岩の白色縁取り石理の模倣に端を発したことと関係があるかもしれない。

4、人物・獣・鳥文の回避

人物・獣・鳥の表現は、クレタの土器装飾の領域においては、その作例が極めて少数であるので、明白な表現回避が存在したと考えられる。これらの題材がフレスコ画の領域において主要な題材であった事実を考えると、奇妙な現象である。

（A）人　　物

人物は、MM Ib 以降 LM IIIc に至るまで決して表現されない。クレタの土器における知り得る限り唯一の作例は、MM Ia のカマレス洞窟出土の土器片である。その人体は、極めて奇怪に表現される。[33]

（B）獣

獣は、EM III, MM Ia を除くと LM IIIc に至るまで決して描かれない。EM III の作例は、グルニアの北のトレンチ一〇出土の土器片群中にみられる。これは、頭、前脚、線影のある胴体からなる山羊を描く。MM Ia の作例は、クノッソス出土の土器片である。これには、三頭の山羊がゲンゴロウとともに描かれる。

（C）鳥

鳥は、人物・獣と比較すると、その作例は多い。グルニア出土の MM Ia の土器片のアオサギがその最初の作例である。MM IIIb の「神庫」'Temple Repositories' 出土のメロス（Melos）型水さし[34]には、飛行中の鳥が描かれる。LM II のメロス島のフィラコピ（Phylakopi）出土の浴漕断片には、二羽の水鳥がアシ、パピルスの間にそれぞれいる場景が描かれる。LM II のパピルスのジャア同様に、ナイル河畔描写のフレスコ画の影響かもしれない。

む　す　び

クレタの土器装飾文は、新石器時代後期から LM II に至るまで、明色地暗色文と暗色地明色文という二大装飾様式を用いて、自然主義と形式主義という両極の間で展開すると言うことができる。

注

① E. Meyer, Aegyptische Chronologie, 1904; 'The Palace of Minos At Knossos' (以下特記なき場合は巻数と頁数のみを示す) I p. 30 から引用。

② I p. 25.

③ 村田数之亮『ギリシア美術』一九七四年、東京、七一頁。

④ グレイズ・スリップとグレイズとの差異は、私には判らない。本稿では、グレイズを釉薬、スリップを化粧土と解釈する。

⑤ 釉薬は、珪酸を主成分とするが、これとの化合物によって異なる。その中でアルカリ釉は、最も古く、最も不確かなもので、エジプト、シリア等で使用された。クレタの釉薬は、アルカリ釉かもしれない。しかし、土器と陶磁器の区別の指標が釉薬の有無にあることを考えると、クレタの釉薬は何か判らなくなる。

⑥ D. Mackenzie, 'The Pottery of Knossos' JHS. xxiii, 1903, p. 158; I p. 62 note 2 から引用。

⑦ op. cit. p. 172; I p. 23 から引用。

⑧ I p. 593. その代表的作例は、クノッソスの西庭のクルウラ出土のカップとボウル断片である。

⑨ I p. 596. その代表的作例は、礫岩の模倣と考えられる「神庫」出土の水さしである。

⑩ 多彩は、LM Ia と LM III のクノッソスにみられる。

⑪ D. Mackenzie, 'The Middle Minoan Pottery of Knossos' JHS. 1906, pp. 253—4. 彼は、両様式の統一形態が明地と暗地のパネル状交代にあると述べる。

⑫ I p. 112. クレタのピュクシス (pyxis) の螺旋文は、メロス島のそれと極めて類似しているので、輸入品かその模倣と考えられる。p. 114—5. ピュルゴス (Pyrgos) のピュクシスにみられる新石器中期の刻線文は、キクラデスからのピュクシスとともにもたらされた。EM III の新石器中期の装飾文の普及は、MM Ia に至るまで残る。

⑬ I p. 177, IV pp. 90—1. 新石器中期の幾何学文の MM Ia への再登場は、EM III におけるキクラデス諸島からの影響と、クレタ自体における新石器時代以来土器以外の腐敗しやすい容器に継承されてきた幾何学文の影響によって説明できる。

⑭ クロッカスとサフランは、クロッカス属に属する同属である。サフランは、薬用であった。

⑮ パピルスは、生育地が中央アフリカなので、古代エジプトでさえも栽培する必要があったことが近年明らかになった(大沢忍『パピルスの秘密』三九頁)。それ故に、LM II のクレタにはパピルスは当然見られないことも、ナイル河畔の描写を証明する。

⑯ IV p. 269「なし型」リュトンは、LM Ib に流行する。この起源は、ダチョウの卵殻型リュトンに求めることができる。ダチョウの卵殻型リュトンは、ミュケーナイ第四竪穴墓出土のリュトンのように実際の卵殻に起源がある。クレタでは、MM IIa には少なくとも土器で模倣された。

⑰ アルゴナウトは、和名をタコブネという。小ダコの一種で雌が舟のような殻をつくるので、この名がある。

⑱ IV p. 315 notes 2, 3. 三つ葉型岩は、LM II には、三つのCと点よりなる「トリプルC」'Triple C' LM III には

単なる三つのC構成へと向う。

⑲ IV pp. 118—9. クノックスのクルウラ3出土の球形の土器片には、ファイストスの二枚貝と同一の貝が打出される。しかし、クノックスの貝には、ファイストスの貝の弧の外の磨滅はない。これは、同一の型の使用を意味し、しかもファイストスへのその使用がクノッソスの土器への使用よりも後であったことを意味する。

⑳ IV pp. 183—5. このゴブレットの把手の末端は、ヘビの頭で終る。これは、アダー・マークのヘビの皮膚起源を証明する。

㉑ IV pp. 342—3. この双斧は、すべて二重刃である。二重刃は、ハギア・トリアダの石棺の潅てんの場景が示すように崇拝対象としての双斧の特徴である。また、その斜線は、アルカロコリ (Arkalokhori) 出土の黄金の双斧が示すような儀式用の装飾かもしれない。

㉒ IV p. 349. これは、双斧の礼拝所の描写ではなく、フリーズにおける半円花文とそれを分割する縦筋装 (triglyph) であるという説もある。

㉓ I p. 607 notes 1, 2. MM I のメロス島のフィラコピ出土の土器には、男が描かれる。その男は、両手を挙げ、片手に短刀をもつ。エヴァンズは、この男のスタイルがペッツオファ (Petsofa) 出土の人体像と類似しているところから、フィラコピの表現がクレタの人体表現の影響によると考える。それ故に、MM II では、今までクレタで出土する土器片の量から推測されるよりももっと多くの人体表現が存在していたにちがいないとエヴァンズは述べる。

㉔ メロス型水さしは、反り返った口頸部、球形に脹んだ器体を呈する。

付記　掲載図版はすべてエヴァンズの書からの引用である。